

特集：建築の 持ち主

表紙デザイン：大橋修 (thumb M) 装画：qp

004 アンケート 建築は誰のものか

文：石上純也、井上章一、大月敏雄、**岡啓輔**、小野田泰明、鯨井勇、篠原雅武、たかぎみ江、長田直之、中村良夫、馬場正尊、平山洋介、藤森照信

022 年表 近現代日本の建築と所有

034 創作 保留の場所 利部志穂

040 解説 所有 立岩真也 ……『政治学事典』(弘文堂)

042 インタビュー 建築と所有 立岩真也

064 写真 人間の位置 qp

072 対談 〈建てること〉の射程 坂本一成 × 塚本由晴

090 多木浩二氏追悼企画 『生きられた家』再読

文：長谷川豪・能作文徳・長島明夫

このPDFは2011年12月刊行の『建築と日常』No.2から岡啓輔氏の執筆部分を抜粋したものです。右ページは全体の目次です。

<http://kentikutonitijou.web.fc2.com/no02.html>

▼岡啓輔

僕は本が読めない。簡単な小説をかなり努力して一冊／一ヶ月。ちよつと難しいのは一冊／半年。「難しいぜ」と言われる本は読了したためし無し。ちよつとした読字障害なのだそう。この号に出ている立岩さんの『人間の条件——そんなものない』

も、こうやってアンケートを依頼してくれた『建築と日常』も、本棚にバシッと立っちゃんいるけどちゃんと読めていない。僕の本棚は「いつかこういうモノが読める人間になりたいものだ」という憧れの陳列棚でしかない。

そんな人間は建築(学)には合わないと言われるけど、全く違う、建築はそんな僕のものでもある。かなり知識は足りないし、論理的な思考など出来ていないけど、僕は建築を僕なりの位置から僕なりの角度でどうにかこうにか堂々と登り続けているつもりだ。建築は建築が好きで建築を目指さんとする全ての人にドガーンと大きく開いている。僕は建築の器の大きさを信じている。「建築家の条件——そんなものない」と信じているのだ。

*

僕は二十代の頃、沢山の建設現場で職人として働いていた。土工、鉄筋屋、型枠大工、2×4の大工などいろいろやった。でも、どこの建設現場においてもモノを作る主役であるはずの職人の地位は低く、時に惨めさを感じるほどであった。設計屋と監督が使うトイレと職人が使うトイレは、明確に分けられていたりした。ヒエラルキーの頂点に設計屋がいて、職人は最底辺に位置づけられていた。設計屋が描いた一本の線を忠実に再現する事だけが職人の仕事であり(どんなに引かれた線であっても)、職人がちよつとした創意を表す事などあり得なかった。そればかりか、作業上必然的に残るわずかな手の痕跡すら丁寧に消されていた(僕はこういう事は、人間として本当に酷い事だ



岡啓輔《蟻罎鳶ル (Arimaston Building)》建設中 (2011年8月27日撮影)

と感じている！ 奴隷扱いか!?)。

誰が作ったかを問わず、手の痕跡を消し、抽象度を上げ、設計屋の意図を明確にするというのがこの数十年の流行りなんだろうけど、ほとんどの建築は、味も素っ気も無く、ただスカスカの風が吹いてるだけだ。サトさん、オイカワさん、ハヤシ、エビちゃん、まさつくくん、ひろやん、ゴウさん、ウケバナ、オガワちゃん、ごろうくん、カズヒロ、ヤンツ、タロー、ヒローシ、ヤマモツさん……、沢山の職人達が、真夏の炎天下塩を舐めながら、土砂降りの雨に打たれながら、ガチガチ震えながら、筋肉軋ませ、グッタリ疲れながらも、どうにか頑張ってる。こういう人達を、リスペクトも感謝もせずに良いわけない。建築現場の職人が減ってきて困ってるって声をアチコチで聞くけど、当たり前だ。無視され、消される存在でいたいはず誰だってないじゃないですか。

建築が表現すべき事は、設計屋のチマチマした理屈だけじゃない。「大自然に抗う為に、沢山の人間が集まって、がんばってがんばって作られるとても大きなモノ」＝建築として、当たり前前に表現すべき事がもつと沢山あるはずだ。建築は設計屋の為だけにあるのではない。

*

僕は今、とても小さなビルを手作りで作っている。もう工事を初めて六年近くになるけど半分出来たかどうかというところ。いろいろな事に努力しているけど「現場をシートで隠したりせ

ず近所の人々にフルオープンで見せながら建設する」もとても大切な要。現場フルオープン主義者なのである。

近所の人達は地下の穴を鶴嘴とスコップで一年半掘り続けるところから見てくれている。その後も続く悪戦苦闘ぶりは、建築など知らずとも「見せ物」として充分面白いものになっているはずだ。そして僕は、見ている人達に多くを教わる。お年寄り達には土地の歴史や想い出を、子供達からはこの建設中ビルが与えているダイレクトな感情を。「ヤッベ〜！ 超カッキ〜!!」「うっわ〜、なんじゃこれ〜？ ハウル〜？」。とにかくこの現場で沢山の人達に出会い、様々な事を教わりながら進んでいる。建築現場を建築関係者だけのモノにしない。御近所の人々、通りすがりの人々とも共有する。

※最近、近所の小学生が学校の課題「尊敬する人」という作文で「隣でビルを作り続けている人」(僕の事)を書いてくれたそう。クウ〜うれしい!! ただの自慢でした。

*

あとひとつだけ。未来へ。

今の日本に流通しているコンクリートだと、建築の平均寿命三十年ほどっていうのは物理的にしょうがないようだ。三十年ほどとはあまりに短過ぎる。自分の人生すらまかなえてない。これじゃあ「この建築は私だけのモノ」という狭い意識からなかなか脱せないのもわかる。これを、五十年、百年と延ばせれば、自分の人生の終わった先にまで想いが広げられる。建築は、本

来そうあるべきなんだ。

今の建築寿命の短さには、政治や経済や産業や色々絡みまくっていて、それが簡単にはほぐれない事になっているのはわかる。でも、もう延ばさないとイケないはずだ。エネルギーの事とかもあるし。建築は、数年、十数年を寿命と考えて作られる家電や自動車とはわけが違う。百年という時を考えなきゃいけない。それは足が竦み、身震いする事だ。でも、未来を考える事。未来の人々の事を想い作る事は、建築の宿命であり役目なのだ。素晴らしい事なのだ。建築は、施主の為だけにあってはならない。施主が死んだあと、沢山の未来の人の為にもあるのだ。

百年もビビるけど、僕が作っている蟻罎鳶ルのコンクリートは、ある研究者から「二百年保つ」と言ってもらえている。二百年!! プレッシヤーデカ過ぎ、泣きそう、チョービビります。でもね、がんばりますよ。建築が好きですから。

*

「建築は誰のものか？」という問いを、可能な限り広く深く、未来の遠くに、出来るだけ多種多様沢山の人の設定する事で、建築は自ずと美しく豊かなモノになっています。僕は、そういう事を信じています。

【おか・けいすけ】建築家。1965年生まれ。RC作製所・岡土建代表。高山建築学校の学生を経て、現在は運営に携わる。2005年より自邸《蟻罎鳶ル》(SD Review 2003 藤森賞)を東京都港区に建設中(磯達雄氏によるレポート「ひとりでビルを建てる男。」が『ほぼ日刊イトイ新聞』にて連載中)。『藤森照信 21世紀建築魂』(INAX出版)に藤森氏との対談が掲載。